

常磐松文庫蔵『狭衣下紐』中臣祐範奥書本

(付) 大村由己年譜

奥 田 勲

解 題

本誌前号において、常磐松文庫蔵『狭衣下紐』寛佐奥書本を影印に付し、若干の解題を行なった。このたびは前回述べたと同様の趣旨によって、同じく中臣祐範奥書本を紹介する。なお、『狭衣下紐』がだれに宛てて書かれたか、あるいはだれの求めに応じて書かれたのか、という問題が筆者にとって懸案であったが、その解明の手がかりとして紹巴の同時代文人の一人、大村由己の年譜を付載し、今後の考察の資料とする。

*

実践女子大学図書館蔵常磐松文庫本『狭衣物語』(No.74308~11)は写本六帖で一括されて箱に納められているが、第一帖から第四帖までが狭衣物語であり、第五・六帖が狭衣下紐となっている。以下それらの書誌の概略を記す。

○箱

桐材、かぶせ蓋、溜め塗り、十文字打紐を付す、列帖装柶型本六帖を収む、

(法量) (全て外規) 蓋 縦十七・九糎、横十八・七糎、高七・七糎

身 縦十七・〇糎、横十七・五糎、高八・六糎

(蓋上墨書) さころも 四冊

したひも 二冊

(備考) 蓋上書は横位置にて書かれたれば、書籍の向きはそれと九〇度違へり、

○狭衣物語 四帖

江戸中期写、列帖装柶型、斐紙、縦十六・〇糎、横十五・三糎、一頁十行、一行約十八字、紺地に金泥にて秋草を描き金銀切箔・砂子を散らしたる表紙、金泥地見返(文様は各冊異なる)、各冊に次の諸印あり、「芸叢／之印」单廓朱方印、「岡田真／之藏書」複廓朱長方印、「芸／叢」陰刻菱形朱印、「実践女子大／学図書館印」单廓朱長円形印、「常磐松文庫印／七四三〇八」(七四三一一)单廓朱長方印、

(題簽) (雷文繫ぎ) (中央)

わいのちや 一(一、三、四)

○狭衣下紐 二帖

体裁等「狭衣物語」に同じ、但し、表紙は彩画なし、見返しは金銀切箔・砂子にて横雲を画く、

(題簽) (雷文繫ぎ) (中央)

したひも 一二(三四)

(奥書)

此狭衣抄二冊臨江齋紹巴

被注之依許可書写之早

天正廿年三月日中臣祐範

この下紐は奥書の示すところに従えば、天正二十年(一五九二)三月九日に中臣祐範が著者紹巴の許可を得て書写したものである。祐範は春日社家東路井家で紹巴門下の連歌師でもあった。天正十八年(一五九〇)四月に独吟千句(大阪天満宮文庫蔵)を成し、慶長四年(一五九九)九月十八日の山何百韻(書陵部蔵)には、紹巴・宗具らとともに参加している等の連歌の事績がある。

祐範本の下紐はすでに指摘されているように(注一)紹巴の初稿に最も近い形態を保有している重要な本である。紹巴の加筆や昌叱説の書き入れを含まない天正十八年成立の原態が二年後にほぼそのまま書写されたと考えられる。

(注一) 川崎佐知子『「狭衣下紐」諸本考』(『中古文学』第五十五号、平成七年五月)

(付) 大村由巳年譜

はじめに

狭衣下紐の諸本研究は近年急速な深まりを見せている。従来、漠然と考えられていた成立・流動の様相がきわめて具体的に示されるようになり、いく種類かの活字本でそれを克服することは不可能であるばかりでなくかなり危険であることさえ明らかになってきたというべきであろう。しかし元々のところに立ち戻ってみた場合、この注釈書がどのような意図で著述されたのかは依然不明である。なぜ紹巴なのか、なぜ狭衣なのかという疑問は容易に解けそうにない。そして当時、需めに応じてこの種の著作がなされるのが常のことであつたことから、依頼者はだれであつたかも知然追究しなければならぬが、従来問題にされていなかった。筆者は下紐の諸本を調査・紹介する過程で、その成立・流動圏がおのずから視野に入ってくるに従い、ひとつの仮説を立てるにいたつた。まず、下紐の序文は次のように始まる。

此の下紐といふ狭衣の抄は、ながらの橋のあたりより、よろづの物語をあつめ給へる中にも、筆のあやまりをうつしけるまま、ことはりたしかならざる所々をしるすべしと有しかば、……(常磐松文庫寛佐奥書本に適宜濁点、読点を補った)

これに続く部分は、賀茂神社から感得したという神秘的な行文であるが、この冒頭部分は隴化しているものの具体的に成立事情を語っていると考えられる。要するに、ながらの橋のあたりの人物が物語の収集をしていて、狭衣物語を読むために必要を感じて紹巴に注釈を依頼したということであろう。この人物として天正頃に紹巴と交流があり、文事に深く関わ

凡例

- 一、記載順序は、年号・西暦・由己の年齢・月日・事跡・出典を原則とする。
- 二、事跡の記事は、典拠とした資料の表記・表現に則って作成した。
- 三、出典名の『言経卿記』は頻出するので（言）と略記した。なお『言経卿記』の由己関連記事は文事や重要な動向を示すものに限って収録した。
- 四、●印を付したのは参考記事である。
- 五、以下の参考文献の恩恵を受けた。記して謝意を表する。
 小高敏郎『近世初期文壇の研究』（昭和三九、明治書院）
 庵邊巖「梅庵由己伝補遺」（『山梨大学教育学部研究報告』二八、昭和五二・一二）
 同「大村由己と藤原惺窩」（『日本歴史』昭和五三・一〇）
 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期』（昭和四七、明治書院）
- 六、本稿は、実践女子大学上野英子、同大学院博士課程越後敬子、同修士課程中原香織・藤原和佳子・松本智香・三好香織、お茶の水女子大学大学院博士課程庭山千鶴の協力によって成ったものである。

天文五年（一五三六） 一歳

○この年、誕生か。

○このころより、秀吉に仕えるか。

永禄三年（一五六〇） 二五歳

天正四年（一五七六） 四一歳

○一一・九、何船百韻に参加か（梅庵とあり）。

●三・一七、山科言経、徳大寺へ桐壺・帚木二冊返却（言）
 ○一一・一八、何船百韻、紹巴・由己・昌叱・心前・永種

天正元年（一五七三） 三八歳

・隆慶・兼如・鶴松・春阿（国会連歌合集五〇・書陵部・天理）

天正八年（一五八〇） 四五歳

○一、これ以前に秀吉のお伽衆として仕え、『播州御征伐記』を著す。

天正一〇年（一五八二） 四七歳

○二・一八、源氏物語竟宴連歌、玖・勝熊・玄旨・友盛・安津・由己等（天満宮）

●九・一七、言経、柳原（淳光）・正親町（季秀）・烏丸（光宣）等と共に臨江斎紹巴（連歌師）に招かる（言）

○一〇、『惟任退治記』を著す。

天正一一年（一五八三）

○一一、『柴田退治記』を著す。

天正一三年（一五八五） 五〇歳

○七・一〇、和泉貝塚に在りし本願寺頭如を初めて礼参し、光寿同席にて自作の軍記を読む（頭如上人貝塚御座所日記）

天正一四年（一五八六） 五一歳

○正・三、山科言経を招ぎ、五日の和歌会興行につき談合（言）

○正・四、和歌会の先礼に言経を訪問、金品を贈る（言）

○正・五、由己亭和歌会始。予（言経）・冷泉・四条・橘

本・堯熙（山名慶五郎、但馬国）・古継（関白殿案内、薄田伝兵衛尉）・同新栄三上越前守、真継（後出真隆、

加陽伊右衛門尉、山名内）等、僧衆、禅高（山名伊予守入道、豊国、因幡国）・紹空（凌雲軒、本願寺内医者）

・由己（梅庵）・半入（殿下内、佐久間与六郎入道、家勝）・青均（当津者）・光珎（日取者、殿下内）・相春（富嶋入道）・無由・喜運（医者、京都三条烏丸脱か）

町者也）等也、当座之時加衆、秀隆・清忠・久綱等也（言）

○正・六、由己亭漢和聯句会（言）

○正・一〇、由己亭漢和聯句会（言）

○正・一二、言経、由己より独吟百韻の懷紙を借りる（言）

○二・二六、何垣百韻、於臨江草庵、松・紹巴・昌叱・白・玄旨・秋（大覚寺）・心前・輝資（日野）・玄以・全宗・由己・友益（富山県図〈志田文庫〉）

○三・八、言経より『冷泉家系図』を書き送られる（言）

○四・二、言経に『紹巴独吟千句』を貸与（言）

○四・三、言経を朝粥に招ぎ、百句付の本を貸与（言）

○四・六、由己亭連歌会。予（言経）・山名禅高（豊国）・由己（梅庵）・長春（播州書写山、金蔵坊）・実嘉（同山）・光珎（殿下内）・文閑（濃州衆）、青均（寺内衆）

・相春（富嶋）・重興（三上）・某（執筆也）（言）

○四・七、言経、由己を訪問し、細川幽齋馳走の事を談合

す(言)

○四・一二、幽斎、由己の取り成しにて冷泉家相伝定家自筆の『三代集』を披見す(言)

○四・一三、言経より新写の『連歌新式』を渡さる(言)

○四・一九、言経、言緒を伴い由己を訪問、飛鳥井栄雅の詩歌を贈る(言)

○四・二六、由己亭連歌会、閑斎(大智寺西堂、讃州衆)

・小韵(言経)(言)

○五・一、言経、由己に百句付返却、また由己亭和漢聯句会あり、小韵(言経)・由己・真隆(加陽伊右衛門尉)

(言)

○五・二、山何百韻、紹巴・実善・昌叱・心前・文閑・寿謙・由己・清長・正繁・徳順・紹与・梅松(内閣文庫)

〈墨海山筆四〉

○五・六、由己亭和漢聯句会(言)

○五・七、由己亭夢想連歌会。漢和聯句会(言)

○五・一三、言経、由己より紹巴作の『連歌新式』を借りる(言)

○五・一八、言経、由己に『独吟千句』・『新式』を返す(言)

○五・二二、白江正善亭夢想連歌会。予(言経)・下間侍従法橋(頼純)・妙法院内半蔵(今小路大蔵)・由己(梅庵)他(言)

○五・二五、由己亭連歌会。予(言経)・禅高(山名伊予守入道)・頼純(下間侍従法橋)・由己・「本門衆」祐

心他。言経、由己に『年代記』を貸す(言)

○五・二六、言経、由己より『職原抄』を借りる(言)

○五・晦日、言経、由己に『拾芥抄』を貸す(言)

○六・一、山名禅高亭法楽連歌会。予(言経)・禅高・頼純・由己他。(言)

○六・九、由己亭和漢聯句会。宗仲首座参加(言)

○六・二〇、言経、由己亭にて『源氏物語』を読む。桐壺卷・帚木卷少々(言)

○六・二五、由己亭夢想連歌会。予(言経)・閑斎(大智寺西堂)・頼純(下間侍従法橋)・卜真津田、入道(殿下御内)・由己・弘閑西坊社僧・堯海池坊同社僧・青・元祐長崎、入道・相春富嶋、入道・重興、(三上)・飛驒寺守下侍内・正三、・正善善五郎執筆(言)

○七、この頃より、天満宮別当

○八・五、由己亭連歌会(言)

○八・一〇、言経より宗祇独吟連歌を借りる(言)

○八・一六、言経に『連歌至寶抄』の書写を嘱す(言)

○八・二八、言経、梅庵に見舞に罷向。中島天神社拝殿造営(言)

○九・一、言経、由己を訪問。『連歌至寶抄』写本を由己に遣す。由己亭連歌興行。山名禅高・楠長諱・増田長盛

(言)

○九・九、言経を朝食に招く。言経、『職原抄』を返却。また『連歌至寶抄』写本を遣す(言)

○九・一九、言経に『天正記』を貸す(言)

○九・二五、由己亭法楽連歌会(言)

○九・二七、言経、由己に『天正記』を返す。由己、為満に『韻府』を貸す(言)

○一〇・二二、兼孝、由己亭にて『源氏』を講ず。和漢聯句会(言)

○一〇・二五、兼孝宇喜多忠家亭にて『源氏物語』を講ず。言経・長諱・由己等参会(言)

○一一・三、言経、由己より『紀氏新撰集』を借りる。言経、『拾遺愚草』の書写を嘱せられる(言)

○一二・一、言経、由己に『拾遺愚草』を書写し贈る。『紀氏新撰集』を返す。(言)

○一二・二、言経、由己に『一枚年代記』を貸す(言)

○一二・六、言経に『名目抄』を返す(言)

○一二・八、天神社焼亡。言経、由己及び朝盛を見舞う(言)

○一二・一四、言経、由己に『一枚年代記』の書写を嘱せられる(言)

○一二・二五、由己亭法楽連歌会。言経を訪問(言)

天正一五年(一五八七) 五二歳

○正・一、言経・為満・隆昌、由己亭に年礼に赴く

○正・八、為満に和歌のことを問う(言)

○正・九、由己邸歌会始。(天正一四年正月五日とほぼ同

じ顔ぶれ。他に) 溝江大炊助長成・中江左兵衛尉榮繼・津田卜真・片岡長雲入道等(言)

○正・二五、由己亭連歌会(言)

○正・二六、由己亭夢想連歌会。願主仙石秀久妻。徳丸・千丸・禪高・予(言経)(言)

○二・一六、由己、細川幽斎に言経勅勘有免の取り成しを依頼す(言)

○二・二〇、秀吉島津征討出馬。由己扈從につき扇を銭す

○二・三〇、言経、為満と共に由己出陣の暇乞いに赴く(言)

○三・二六、赤間宮奉納和歌短冊(下関二千年史)

○六・一八、箱崎松原和歌会短冊

○七・一五、言経、由己亭を訪問。月見和漢聯句(言)

○八・二三、由己亭聯句会(言)

○八・二七、由己、兼隆を招請す。和漢聯句興行(言)

○九・四、言経に『天正記』の書写を依頼す(言)

○九・五、言経、由己より『三源一覽』を借りる(言)

○一〇・七、秀吉より河内高安内にて百四十石の地を充行われる(言)

○一一・一〇、宇喜多忠家、由己に『源氏物語』宿木を書写し送る(言)

○一一・一一、由己亭にて和漢聯句興行(言)

○一一・二八、何垣百韻、玄以法印・松・秋・紹巴法橋・白・昌叱・友盛朝臣・玄旨法印・心前・頼隆朝臣・由己

・全宗法印・友益(国会〈連歌合集四四〉・九大細川文庫・京大平松文庫・天理)

○一二・一三、為滿第連歌会。予(言経)・冷(為滿)・四・由己等(言)

○一二・二〇、伏屋十内亭夢想連歌会。一盛・由己・予(言経)(言)

○一二・二五、中島天神社に参詣。由己亭にて法楽連歌興行、予(言経)・山名慶五郎(堯熙?)・由己等(言)

天正一六年(一五八八) 五三歳

○正・四、由己邸歌会始。予(山科言経)・冷泉・四条・

勝俊(殿下御内、木下式部大甫。長嘯子)・古継(殿下御内、薄田若狭守)・長治(殿下御内。平野大炊頭)・

長成(殿下御内、溝江大炊助)・正善(殿下御内、白江善五郎)・長康(安津内、アタキ右近允)・長諳(殿下御内、楠河内守入道〔正虎〕、式部卿法印)・安津(殿下

案内、宇喜田忠家入道〔忠家〕、式部卿法印)・半入(殿下御内、佐久間与六郎入道〔家勝〕)・由己(殿下御内)・

光珎(殿下御内)・良三・祐恵(寺内)・任世(安津内)・寿正(白江入道)、読師(予)・講師長諳(言)

○正・九、白江寿正にて連歌。予(小韵、言経)・冷(乙虎)・四(卜也)・由己・正善・任世・永春・誉次(言)

○正・九、由己、和歌会の事を興門(佐超)に礼せんとし、言経に同道を依頼、参謝す(言)

○二・三、帰坂、言経より診脈投薬せらる(言)

○二・四、白江正善五郎亭夢想連歌。正善・予(言経)・卜也(四条)・乙虎(冷泉)・由己・寿正(白江)・夢

梅・城俊・陣一・永春等(言)

○二・八、永春亭連歌。永春・由己・冷・予・四・青均・白江寿正・同善五郎・任世・城俊・陣一等(言)

○二・一〇、言経、由己の依頼により聚楽第和歌会記を書き送る。また、梅庵―甚兵に葉を遣わす。

○二・一二、冷泉亭連歌会。予(言経)・冷・四・梅庵・光珎・寿正・善五郎・任世・永春・陣一等(言)

○二・一六、言経を粥に招く、白江善五郎同道。出雲国大社女神子色々神歌・小歌・舞。夢想連歌、願主・由己・予(言経)(言)

○二・一九、寺町光直(孫右衛門尉)亭連歌会。安津(宇喜多忠家)・光直(宇喜多宰相秀家殿御内、寺町)・貞親(宇喜多宰相秀家殿御内、長船越中守)・家利(宇喜

多宰相秀家殿御内、豊前守)・小韵(予)・由己(梅庵、寺内)等(言)

○二・二一、言経に『源氏物語絵詞』を貸す。由己、上洛につき、言経、書を送り、細川幽斎に身上赦免執成しの依頼を請う。白江善五郎亭連歌、由己・予(言経)・正

善・冷(言)

○三・九、下坂す(言、十日条)

○三・二〇、由己亭連歌会。宇喜多安津(忠家、但不出座

- ・由己・貞親（長船越中守、ウキタ（秀家）宰相殿御内）・家利（岡豊前守、同御内）・道悦（□□花房入道、同御内）・光直（寺内）、同御内）・禪高（山名豊国）・予（言経）・長諳（楠入道）・榮繼（中江左兵衛尉、但不出座）・友龍（清臺寺、宰相殿御内）・玄正（橘、宰相殿御内）・任世（安津内）・長康（アキタ右近、執筆）（言）
- 四・一、言経、由己邸訪問（言）
- 四・一三、言経に衣文の事を依頼す（言）
- 四・二〇、四・二五、行幸記録を書かんとし言経に談合す（言）
- 五・三、言経、在洛の由己に奉公先韓旋依頼の書状を送る（言）
- 閏五・三、言経より『三源一覽』全部一〇冊返却さる（言）
- 閏五・八、漢和聯句、西咲・玄旨・兼統・有節・紹巴・素然・昌叱・清斎・有和・心前・寿三・由己・友益（北岡文庫）
- 閏五・一四、言経、由己邸を訪問し、『聚楽第行幸記』を披閲す（言）
- 閏五・一七、言経を朝餐に招く。言経に『聚楽第行幸記』の書写を依頼す（言）
- 六・一、冷泉為満に招かる（言）
- 七・二五、為満に定家筆跡の鑑定を求める（言）
- 八・一五、聚楽第観月歌会（豊公歌集）
- 九・六、言経、昨夜、帰坂の由己を訪問（言）
- 九・一六、由己邸に於て深水宗方連歌興行。予（言経）・禪高（山名入道）・勢辰（甚蔵坊法印、肥後国衆）・古繼（薄田若狭守）・頼純（下間侍従法橋）・家勝（佐久間与六郎入道）・由己・勝久（粟屋越中守入道）・光直（寺内孫右衛門尉、宰相殿内）・宗方（フカミ入道、嶋津内）・祐恵（寺内衆）・忍清（宇喜多安津内）・繁清（住吉社々人）・永弘（千石権兵衛内）・重種（執筆、大坂衆）等（言）
- 九・一九、言経、依頼の『六家集抄出』を持参（言）
- 九・二〇、言経を招き、連歌二折（言）
- 九・二四、由己亭連歌会。楠入道長諳（正虎）・言経等連歌一折（先日の残り）（言）
- 九・二五、言経、天神社に参詣、次いで由己邸連歌会、予（言経）・由己・光弥・祐恵・秀斎（千石権兵衛内、執筆）
- 九・二六、但馬へ湯治に赴く（言、二八日条）
- 一〇・二三、言経、由己室に音信す（由己、未だ湯治より帰宅せず）（言）
- 一一・一、言経、昨夜帰宅の由己を訪う（言）
- 一一・三、言経の独吟（夏に由己に遣わせるもの）に加點。言経に綿を贈らる。また、冷泉為満蔵の『東坡集』・『山谷集』を言経より借りる（言）
- 一一・四、言経より『冷泉本毛詩』・『礼記』を借りる

(言)

○一一・六、易林亭聯句会。周長(夢梅子 十二句、天龍寺妙智院弟子、喝食)・由己(三十一句)・小韵(言經、二十一)句)・宗瑞(十八句、欽齋、東国衆)・景治(十句、天龍寺妙智院内に學問、興門内橋(端)坊子)易林(八句、夢梅齋)(言)

○一一・七、聯句続行(言)

○一一・八、『東坡集』・『山谷集』を言經に返却(言)

○一一・一四、言經、由己を訪い『源氏物語』を校合(言)

○一一・一五、言經、本願寺光壽内衆宮部丹波守秀吉の臣平野長治への周旋を請うため、由己と談合し兩人より書状を遣わす。由己に聯句及び和漢聯句等の懷紙を借りる(言)

○一一・一八、言經、由己より平野長治の返書を受領す(言)

○一一・二六、言經に『至宝抄』の書写を依頼(言)

○一一・二七、由己亭聯句会(言)

○一二・四、言經、『至宝抄』の書写を完了、由己に届ける(言)

○一二・二九、由己、秀吉より不興を許される(言)

天正一七年(一五八九) 五四歳

○正・四、言經・為滿・隆昌、由己を訪い和歌のことを談合(言)

○正・五、由己亭和歌会始。言經・冷泉・四条・道齋・古

繼・長康・重種・法中・長諧・安津(宇喜多入道)・禪

高・半入・由己・忍清・宗安・城沢等(言)

○正・六、由己亭夢想連歌会。願主仙石秀久(言)

○二・七、細川玄旨邸歌会、秀吉・公遠・晴季・道澄・晴

豊・全宗・基孝・輝資・雅繼・昌叱・紹巴・実条・永孝

・宗易・由己・親綱・玄以・忠興・玄旨(良恕聞書第一

『叢塵集』・御五時代和歌)

○二・二六、何人百韻、紹巴・長澄・玄旨・昌叱・禪高・

安津・似生・新慶・玄仍・能札・由己・一千世(京大平

松(集連の内)・天満宮)

○三・一三、為滿に硯を借りる(言)

○四・一五、定家の筆跡を見たき者のために言經に為滿への取り成しを請う(言)

○四・一六、言經、由己の使者に為滿所蔵の定家筆跡を渡す(言)

○四・二六、何人百韻、紹巴・法悦・昌叱・英佑・由己・

恕慶・永純・友益・玄仍・紹忍・長俊・為暁・一千代

(国会(連歌合集一一・四三)・天理綿屋・天満宮)

○五・三、為滿に定家の筆跡を返却(言)

○七・二八、『天正記』の清書を言經に嘱す(言)

○七・三〇、言經、由己に『天正記』のうち金銀の記(金

賦の記)・『大政所御煩平愈記』一冊を清書し送る(言)

○八・六、言經に『天正記』のうち金銀の記(金賦の記)

を貸す(言)

○八・九、『天正記』のうち御産の巻を作る。言経に堂上衆の次第につき不審を質す(言)

○八・一二、言経、為満所蔵の定家筆跡を由己に持参す(言)

○八・一三、言経に『伊勢物語注』を貸す(言)

○八・一八、言経に『官班記』の書写を依頼(言)

○九・一、言経、興正院佐超を訪い由己の『天正記』を読むを聴く(言)

○九・二、言経より『官班記』を送られる(言)

○九・一三、言経に『天正記』のうち西国征伐の巻の清書を依頼す(言)

○九・一四、言経と『天正記』のうち若公御誕生の記について談合(言)

○九・一五、言経より『天正記』のうち若公御誕生の記を送られる(言)

○九・二〇、言経に『天正記』のうち若公御誕生の記を貸す(言)

○九・二一、言経に西国征伐の巻の清書を依頼す。為満に鷹百首を返却することを言経に依頼(言)

○一〇・二〇、言経より西国征伐の巻を送られる(言)

○一〇・二九、言経に『伊勢物語抄』と『三賢抄』を貸す(言)

○一二・二二、言経に手本を見せる。定家卿仮名遣と同筆

か(言)

○冬、初何百韻、紹巴・白・昌叱・量保・俊孝・玄仍・友益・由己・玄勝・時能・勝熊。執筆一千代

(注) 小高敏郎『近世初期文壇の研究』による

天正一八年(一五九〇) 五五歳

○正・五、言経に『暦数』を貸す(言)

○正・一三、由己亭和歌会始。言経・帥法師(歡仲)・安津法師(宇喜多忠家)・禪高(山名)・半入(佐久間家勝)・長治(平野)・光弥・永純(西国連歌師)・忍清(安津内)他(言)

○正・二四、歌会始の懷紙綴込を言経に依頼(言)

○二・九、言経に『天正記』のうち『西国征伐之記』の書写を依頼(言)

○二・一七、言経より『西国征伐之記』の書写届(言)

○九・二五、由己亭連歌会。梅松(由己小兒)・小韵(言経)・祐恵・光弥・晴長(由己内)(言)

○九・二六、言経、昨日連歌会の懷紙を所望。晩に返却あり

○九・二九、言経より『暦数』返却。秀吉の有馬湯治に随従(言)

●初冬、狭衣下紐成る(自序による)

○一一・二二、懷旧百韻、紹巴・頼藏・昌叱・由己・玄仍・等与・恕云・了程・勢康・宗頼・玄陽・小梅(国会

〈連歌合集一・四六〉・天理綿屋・天満宮)

○一・二七、言経に『二十四孝カナ注』を貸与(言)

天正一九年(一五九一) 五六歳

○正・五、由己・兼如両吟百韻、紹巴点(天満宮、連歌年立では六日)

○正・一九、何路百韻、昌叱・兼如・紹巴・応其上人・由己・玄仍・新慶・長澄・寿三・長俊・慶広・正益・小梅(連歌合集五一)

○正・晦、和漢百韻、紹巴・瑤甫・惟杏・昌叱・友益・玄仍・覚甫・由己・寿恩・令柔・了程(書陵部)

○閏正・二六、何人百韻、紹巴法橋・玄以法印・久大・日大・昌叱・右衛・雅継朝臣・英怙・由己法橋・玄仍・寿恩・友益・景敏(国会〈連歌合集五〇〉)

○二・五、言経より『二十四孝詩注』『伊勢物語』『同歌注』等返却。『逍遙院短冊』を贈る(言)

○二・九、言経に手本・後柏原院案目六一枚・中山宣親短冊・宗世(飛鳥井雅康)短冊・堯孝法印書状等を貸与(言)

○二・二一、言経より『年代記』の書写届く(言)

○二・二六、言経と、徳川家康と直談の件、雑談(言)

○二・二八、言経より『撰家系図』届く(言)

○二・三〇、言経と同行し、家康亭に赴き直談。言経、『公事根源抄』『逍遙院三首懷紙』等を家康に贈る(言)

○三・一、中嶋(佐超室)宛、言経室・冷泉為満らの書を預かる(言)

○三・五、言経、由己亭にて朝食。後、家康に對面(仲介者は由己か)(言)

○三・六、言経より『清花系図戸』等の清書届く。興山上人(応其)に依頼し、文庫建立(言)

○三・八、江戸大納言(家康)亭にて、言経と合流(言)

●三・九、某、狭衣下紐一覽(陽明文庫尚嗣本奥書)

○三・一三、言経より、冷泉為満送付の『藤原定家の懸字』三、『寂然(藤原行能)筆』等届く。夜、言経来訪。言経・冷泉為満・四条隆昌ら、六条寺内居住許諾の件につき、民部卿前田玄以へ紹介のところ、受諾あり(言)

○三・一四、言経に同道して、宇喜多安津法印(忠家)・江戸侍従(徳川秀忠)を訪問(言)

○三・一五、言経に『源氏系図』の書写を依頼(言)

○三・一七、言経来訪。『後小松院宸筆』『御土御門院宸筆』古筆短冊十数枚『広韻』『白氏文集』の一冊・『源氏聞書』等譲渡あり。また『大学』二冊・『韵府』二冊・『玉篇』等の沽却を依頼(言)

○三・一八、言経より古筆短冊を受領。また『源氏物語一枚系図』の清書を受領(言)

○三・二五、上洛し、旅宿の言経を訪問(京都誓願寺阿弥陀本尊移御等の見物か)(言)

○三・二七、言経より『冷泉家系図』の清書を受領(言)

○三・二八、堺へ使者を送る。併せて冷泉為満と言経室宛、言経書状を届けしむ。近衛信輔訪問。留守中、言経来訪。かつて室に申しおきし皮籠一箱（日記・おりすぢ・あさきのこと等で衣裳、家康より誂への草子紙三丁百五十枚等）を渡す（言）

○三頃、近衛信尹、由己に言及し「殿下御近習之人」と記し、天正記の作者とす（三藐院記）

○四・二、猪苗代兼如と同道して、言経の旅宿所文珠院を訪問。連歌を興行す。由己・言経・兼如・応其上人他四人（言）

○四・二二、細川幽斎と同道して、応其上人を訪問。言経等と狂句漢和聯句を興行（言）

○四・二三、言経を招き、新築文庫の二階を住居に提供（言）

○四・二七、和漢百韻、玄旨・西咲・玄圃・紹巴・昌叱・由己・有和・有節・英甫・宗巴（書陵部・広島大福井文庫・刈谷図）

○五・一五、言経、冷泉為満・四条隆昌等の上京に際し、由己への書状を託す（言）

○八・七、言経、『世尊寺・飛鳥井等系図』清書を持参（言）

○九・三、言経を招き、屏風に古筆切を貼ることにつき談合（言）

○九・二〇、言経と古筆勘物のこと談合（言）

○一〇・二七、宇喜多安津（忠家）他来訪。薄暮、言経来

訪、一泊し聯句十句興行。由己・小韵（言経）・宗就（関東衆）・光華（藤原惺窩）（言）

○一〇・二八、言経等と聯句続行（言）

○一一、藤原惺窩、由己の『君臣小伝』に跋文を寄せる（惺窩先生文集）

○一一、柴立、『梅菴古筆伝』に序文を寄す。

○一二・九、言経来訪（言）。和漢百韻、白・由己・西咲長座・紹巴・玄以・昌叱・有節・紹宥・菊齡・玄仍・友益（書陵部・京大平松・広島大福井文庫・刈谷図）

○一二・二四、由己亭（洛中）歌会。言経・龍野侍従（木下勝俊）・幽斎（細川藤孝）・今河入道（氏真）・楠長諳・三上越前守（新栄）・溝江大炊助（長成）・道節（鳥飼）・能札・等安・宗就等（言）

○一二・二六、言経、『職原抄之抄』『系図』等返却（言）

○一二・二八、言経、『玉篇』代として米一石を持参（言）

天正二〇年（文禄元）（一五九二） 五六歳

○正・九、何木百韻、紹巴法橋・玄旨法印・白・日野大納言（輝資）・昌叱・雅繼朝臣・氏長・由己法橋・安津法印・玄仍・友益・長澄・景敏・融成・宗巴（国会〈連歌合集四四〉・天理）

○正・二五、言経と聚楽亭行幸の見物場所につき談合。佐竹築地辰巳角の五六帖とす（言）

○正・二六、言経室等、佐超室とともに由己の馳走により

行幸を見物(言)

○正・二八、言経、為満の『定家筆跡』及び『大學輯釋』を受け取り帰る(言)

○二・十二、言経より『源平系図』を書き送られる(言)

○二・二四、徳川家康上洛す。由己第を訪い宿す(言)

○二・二五、言経、由己と共に家康を訪い、『拾芥抄』を書写し贈る。言経と共に三上越前守新慶の連歌に赴く(言)

○三・一〇、言経、由己の案内にて始めて秦宗巴を訪う。

由己第にて、言経、為將に千首題を教える。言経に、家成より家康よりの扶持米交付の報あり(言)

○三・二〇、言経より『一枚年代記』を書き送られる(言)

○三・二一、言経、出陣暇乞いの為来訪、二百文及び『一枚帝王系図』を贈らる。由己、言経に『井蛙抄』『運氣論』等を贈る(言)

○三・二三、言経、暇乞いの為来訪。由己、隆昌に『長秋詠藻』を贈る(言)

○三・二六、秀吉、肥前名護屋に向け出陣、由己同道か。

●三、中臣祐範、『狭衣下紐』を紹巴の許可を得て書写(実踐女子大学常磐松文庫本奥書)

○春、紹巴、由己出陣に際し歌文を贈る。

○春、藤原惺窩、同じく『梅菴老人韻』を贈る。

○一二下旬、金剛寺に高麗の阿弥陀如来画像を施入か(金剛寺文書、庵澄昭五二)

○この年、名護屋に於て連歌。

○この年、法眼。

文禄二年(一五九三) 五七歳

○二・一一、金剛寺に高麗の阿弥陀如来画像を施入か(金剛寺文書、庵澄昭五二)

○二・一八、由己の書状により言経、宗巴を訪う(言)

○二・二二、言経・為満・四条隆昌、来訪(言)

○夏、藤原惺窩、名護屋滞陣中の由己を訪問

○六・一一、名護屋より帰陣(言六・二四条)

○一〇・二、摂州中嶋より上洛し、言経を訪う(言)

○一〇・一九、言経、兩帝王年号を書き送られる(言)

○一一・一、細川幽斎、伏見に赴く。由己、天満へ下る(言)

○一一・二六、為満・隆昌への書を言経に託す(言)

文禄三年(一五九四) 五八歳

○二・一九、言経、由己に独吟連歌百韻の添削を依頼(言)

○三・四、百韻、大閤秀吉公興行、於高野山青巖寺、松(豊大閤)興山上人(青巖寺、木食)・白(近衛左大臣

信尹公)・鳥(親王家)・常真(尾張内大臣平信雄公法

名、織田内大臣入道)・紹巴(法眼)・徳川大納言(家

康公、従一位家康卿)・玄旨(細川、法印)・中山大納

言(慶親卿)・日野大納言(輝資卿)・利家(前田、前

田中納言)・氏郷朝臣(蒲生)・昌叱(里村、法橋)・

全宗法印(典藥頭侍從)・雅枝朝臣(飛鳥井、飛鳥井大納言)・由己法眼(天滿)・右衛門督(増田長盛)・政宗朝臣(伊達、伊達中納言)・長俊(橋本大外記)(天理・天満宮)

○四・二、言経、家康に同道して細川幽斎を訪う。由己他基打衆七・八人、同亭に在り(言)

○四・三、言経、冷泉殿(為満)・阿茶丸(言緒)・由己と共に家康を訪う(言)

○四・一二、言経、冷泉殿(為満)と共に細川幽斎を訪い、『新勅撰和歌集』を見る。由己も同道(言)

○四・一四、大坂下向の挨拶のため、言経を訪う(言)

○五・二六、言経、由己に添削を依頼せる独吟百韻を返される(言)

○八・二六、由己、大坂下向の挨拶のため、言経を訪う(言)

○九・一二、言経、由己より『周礼全七冊』を借りる(言)

○九・一四、言経、冷泉(為満)と共に由己を訪う。

○九・一九、言経並びに冷泉殿(為満)、伏見に家康を訪う。由己の許に宿泊する(言)

○九・二〇、言経、為満・由己と共に家康を訪う。夕食後、家康・言経・為満・由己等にて、為満持参の『冷泉家伝定家筆三代集及び後土御門・後柏原・後奈良三天皇勅書、冷泉為家讓状』等を見る。為満、家康に『定家筆僧正遍昭家集』を贈る。家康喜び、為満を召し抱えんと言う。そ

の後、由己の需めにより『文献通考』を一見する(言)

○九・二一、言経、冷(為満)と共に由己の旅宿より帰宅する。言経、由己より新作の謡本『吉野詣・高野詣・明智討』を借用する(言)

○九・二六、言経、由己に新作の謡本『吉野参詣・高野マウテ・明智討』を返却する。

○九・二七、言経、由己より謡本『柴田討・北条』等を借用する。

●秋、桑門某、狭衣文談を著す(実践女子大学常磐松文庫本)

○一〇・三、言経、家康の『文献通考』買得のことにつき、由己に書を送る(言)

○一〇・一二、家康の『文献通考』買得のことにつき、由己より言経のもとに書状来る。言経、由己のもとへ音信する(言)

○一〇・一五、家康に見せる草子目録を言経の旅宿に持参する。『治平要覧・タウ伝・性理群書・李白詩・資治通鑑』等(言)

○一〇・二九、家康の相伴衆(三十四・五人)となる(言)

○一〇・三〇、言経、由己の依頼により、書籍のことにつき家康臣加賀爪勝六等へ書状を送る。言経、由己の本のことについて月斎(大草)に書状を送る(言)

○一一・一、言経、草子のことについて由己を訪う。言経、由己と共に殿下(豊臣秀次)に候す(言)

〇一・一、二、言経、冷（為満）共に由己を訪い、書籍のこ
とを談合する（言）

〇一・一、一、言経のもとに、摂津中嶋の由己より書状届
く（言）

文祿四年（一五九五） 六〇歳

〇正・一〇、言経、伏見の由己のもとを訪れるも、由己は
摂津中嶋にあり。言経はこの日由己宅に宿泊（言）

〇正・二七、言経、由己宅にて朝食後、冷泉殿（為満）と
共に家康を見舞う。帰途、由己宅へ向かい、京都に発足
（言）

〇二・二一、言経、由己宅にて朝食後、冷（為満）と共に
家康を訪う（言）

〇四・一、言経、由己を訪う。由己はこの日、摂津中嶋に
下向する（言）

〇四・八、伏見を出、京に上り、坂本から大溝へ琵琶湖を
渡る（言）

〇四、由己、病氣療養のため但馬湯島（今の城崎温泉）に
下向、藤原惺窩と漢詩を唱和す（温泉紀行、八州文藻卷
第六一）

〇五・一〇、城崎を出、帰途につく（同）

〇六・一五、言経、冷泉（為満）の使者に、由己への書状
を託す（言）

〇夏秋之交、藤原惺窩、病臥中の由己を天満の別墅に見舞

う（藤原惺窩自筆詩文集）

〇九・一三、相良宮内大輔長毎宛書状（大日本古文書・相
良家文書七四二・七四六）

〇一〇・一、昨日、言経のもとに由己からの書状あり。言
経これに返報（言）

文祿五年（一五九六） 六一歳

〇二・三〇、言経、為満と伏見に家康を訪い、由己の留守
宅に於て休憩し、大阪天満宮に病氣療養中の由己の消息
を尋ねる（言）

〇四・七、言経、伏見に家康を訪う。まず由己を訪い、休
息する（言）

〇五・七、没（藤原惺窩自筆詩文集）

逍遙院三首懷紙（しょうよういんさん）

- しゅかいし
一五九一・〇二・三〇
- 逍遙院短冊(しょうよういんだんざく)
一五九一・〇二・〇五
- 職原抄(しよくげんしょう)
一五八六・〇〇五・〇二六
- 職原抄之抄(しよくげんしょうのしゅう)
一五九一・一二・二六
- 新勅撰和歌集(しんちよくせんわかしゅう)
一五九四・〇四・一二
- 井蛙抄(せいあししょう)
一五九二・〇三・二一
- 清花系図(せいがけいず)
一五九一・〇三・〇六
- 性理群書(せいりぐんしよ)
一五九四・〇一・一五
- 世尊寺・飛鳥井等系図(せそんじ・あすかいとうけいず)
一五九一・〇八・〇七
- 撰家系図(せつけいず)
一五九一・〇二・二八
- 僧正遍昭家集(そうじょうへんじょうかしゅう)
一五九四・〇九・二〇
- ※定家筆
- 叢塵集(そうじんしゅう)
一五八九・〇二・〇七
- 宗世(飛鳥井雅康)短冊(そうせい(あすかいまさやす)たんざく)
一五九一・〇二・〇九
- 大学(だいがく)
一五九一・〇三・一七
- 大学輯釋(だいがくしゅうしゃく)
一五九二・〇一・二八
- タウ伝(たうでん)
一五九四・〇一・一五
- 治平要覧(ちへいようらん)
一五九四・〇一・一五
- 長秋詠藻(ちようしゅうえいそう)
一五九二・〇三・二三
- 定家筆跡(ていかひつせき)
一五九二・〇一・二八
- 天正記(てんしょうき)
一五八八・〇九・二七
- 東坡集(とうはしゅう)
一五八八・〇一・〇三
- 中山宣親短冊(なかやまのぶちかたんざく)
一五九一・〇二・〇九
- 二十四孝カナ注(にじゅうしこうかなちゅう)
一五九〇・〇一・二七
- 二十四孝詩注(にじゅうしこうしちゅう)
一五九一・〇二・〇五
- 年代記(ねんだいき)
- 梅菴老人韻(ばいあんろうじんいん)
一五九二・〇一・〇三(春)
- 白氏文集(はくしもんじゅう)
一五九一・〇三・一七
- 藤原定家の懸字(ふじわらていかのかけじ)
一五九一・〇三・一三
- 文獻通考(ぶんけんつうこう)
一五九四・〇九・二〇
- 北条(ほうじょう)
一五九四・〇九・二七
- ※謄本
- 名目抄(みょうもくしょう)
一五八六・〇一・〇六
- 毛詩(もうし)
一五八八・〇一・〇四
- ※冷泉家本
- 吉野參詣(吉野詣)(よしのもうで)
一五九四・〇九・二六
- ※謄本
- 礼記(らいき)
一五八八・〇一・〇四
- 李白詩(りはくし)
一五九四・〇一・一五
- 冷泉家系図(れいぜいたけいず)
一五八六・〇三・二七
- 冷泉為家讓狀(れいぜいためいえゆずりじょう)
一五九四・〇九・二〇
- 曆数(れきすう)
一五九〇・〇九・二五
- 連歌至寶抄(れんがしほうしゅう)
一五八八・〇六・一六
- 連歌新式(れんがしんしき)
一五八六・〇四・一三
- 六家集抄出(ろくかしゅうしゅうしゅつ)
一五八八・〇九・一九